

武蔵武士とは何か

加藤良一

令和4年(2022)1月20日

大正2年(1913)3月に発行され、昭和46年(1971)に復刻版として再出版された『武蔵武士』(八代国治・渡辺世祐共著)に興味をもって県立図書館から借りてきた。そこには、勇猛果敢な武蔵国の武士を礼賛する文言が並んでいた。古い書物ゆえ、文体や文字、ことば遣いなど難解なものが多いので、読むのに時間がかかる。

武蔵は武士道の本源地

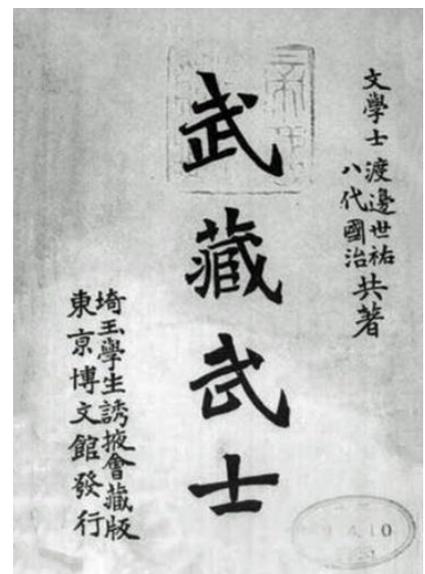
「武相^{ぶそう}の兵は天下に敵なし」とは、近古以来武蔵を中心としたる関東武士の剛勇を称賛したる詞なり。関東武士がこの称賛すべき活動を国史の上に賄ししは、豈^{いか}に夫れ近古に於てのみならんや。既に上古に於ても、この称賛に添ふべき活躍をなし、国史の上に一の異彩を放てり。而して上古に於ては単に彼等が剛勇を以て誇となすのみに止まりしも、中古にありては実に我が国家の地乱興亡に関する大責任をば全く其双肩に負ひたりき。

「額^{ひたい}には箭^やは立つとも背には箭は立てじ」とは、古代の関東人士が常に口に唱へて家訓とし、箴^{しん}誠^{かい}として一族子弟を教育したる語なり。

これは、『武蔵武士』に書かれている一文である。(以下、適当に読み飛ばして頂いて構わない)

「額には箭は立つとも背には箭は立てじ」とは、前進して前から矢を受けることはあっても、退却して後ろに傷を受けるようなことはしないという、武蔵武士の心得である。箭は矢の古称である。

では、なぜ、武蔵、関東が武士の本場だということか。西国も含め全国津々浦々武士は存在していたにちがいないが、武蔵が武士の本場だったとはどのような理由によるものなのか。ここでは、『武蔵武士—そのロマンと栄光—』(福島正義著 平成2年(1990)発行)というもう一冊の著書なども併せて武蔵武士とは如何なるものか読み解いてみたい。



▼武蔵は辺境の地

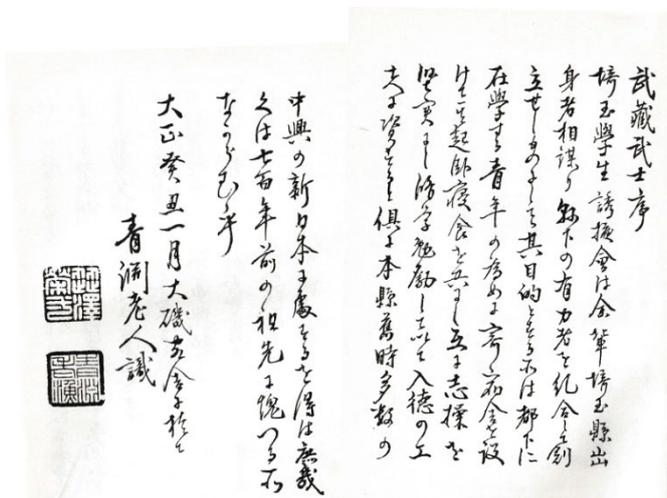
大和朝廷の時代は、奈良、京都などいわゆる畿内が国の中心地であった。そこから遙か彼方の東国は辺境であり、朝廷の権勢が届かないいわばフロンティアであった。東国は永く大和朝廷には従わない蝦夷の勢力圏だった。そこへ朝廷から送り込まれた臣籍降下した皇族の子孫などが土着、やがて平氏や源氏となり、次第に大きな武士集団になっていった。これが武蔵武士の始まりである。

武蔵武士は、武勇に優れ、忠義、礼節、信義におよび質実剛健を重んじる気風をもつ武人であり、源頼朝の鎌倉幕府創立において主導的な役割を演じたという。熊谷直実と直家父子は「本朝無双の勇士」と、畠山重忠は「武士の鑑」と頼朝に大いに賞賛された。その反面、武蔵の武士は政治性に欠けるところがあり、豪族的領主たちの失脚が相次いだりもした。

▼『武蔵武士』と埼玉学生誘掖会

『武蔵武士』の刊行にあたっては、埼玉出身の渋沢栄一が大きくかかわっており、序文を寄せている。

(序文は末尾に掲載)



序文冒頭と最後の頁 (途中は割愛)

発行元の埼玉学生誘掖会^{ゆうえき}※は、東京で勉学に励む埼玉県出身学生のための寄宿舎を設置するなど、学生支援を目的に明治35年(1902) 創設された団体である。渋沢栄一、本多静六^{ほんだせいろく}等が中心となって、当時の東京市牛込区(現在の新宿区)に設立された。初代会頭には渋沢栄一が就任した。 ※「誘掖」は「導いて助けること」

『武蔵武士』は、上下二編に別れている。上編は、第一章緒言からはじまり、武蔵は武士道の本拠地、武蔵武士の勃興、武蔵武士の勢力分布、武蔵武士と鎌倉幕府

の五章で構成され、下編では、畠山庄司重忠、比企藤四郎能員、熊谷直実、金子十郎家忠、長井斎藤別当実盛、岡部六野太忠澄、小野左衛門尉義成、足立藤内右馬允遠元、河越太郎重頼、中条出羽守家長、庄三郎忠家、葛西三郎清重、平山武者季重の13人の武士を紹介している。

令和4年(2022)1月9日から放送が始まったNHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』は、鎌倉時代を舞台としたものだが、そこに登場する13人と『武蔵武士』の13人とはもちろんちがう。

大河ドラマでは、主人公北条義時^{よしとき}※1をめぐり権力争いが展開されるようだ。こちらの13人は、「13人の合議制」と呼ばれる、源頼朝^{よりとも}死後に発足した鎌倉幕府の集団指導体制^{ひょうじょうしゅう}の評定衆^{よしみり}※2である。この13人は、北条時政、北条義時、比企能員、安達盛長、三浦義澄、和田義盛、八田知家、足立遠元、梶原景時、大江広元、三善康信、中原親能、二階堂行政である。三谷幸喜が脚本を手掛けたエンターテインメント、という触れ込みで、ややコミカルな仕上げとなっている。「コメディ大河」と揶揄されてもいるようだ。

※1 長寛元年(1163)一元仁元年(1224)、北条氏の一門。鎌倉幕府第2代執権。伊豆国の在地豪族・北条時政の次男。北条政子の弟。得宗家2代当主。源氏将軍が断絶すると義時が鎌倉幕府の実質的な指導者となった。幕府と朝廷の対立激化により、1221年に後鳥羽上皇より義時追討の宣旨が全国に発布され朝敵となるも、幕府軍は京都に攻め上り朝廷を制圧。

※2 鎌倉時代、幕府の最高政務機関であり、行政・司法・立法のすべてを司っていた。

▼武蔵は天府の地

『武蔵武士』の冒頭では、天府の地*として武蔵を讃えている。

※天府の地とは、地味が肥え、物産の豊富な土地、天然の要害、天皇の倉の意。

秀麗なる山、清冷なる水によりて涵養せられたる我が国民は、古来より秋霜烈日の如く凜乎として動かし難き特種の国民性を有せり。これ所謂大和魂にして、中古以来武士によりて専ら伝承せられ、發達奨励せられたるを以て又武士道と称す。

このように、我が国特有の武士道と大和魂を礼賛することばではじまる。ついで「大和魂と武士道——武士道と国民道徳——武士道国民一般に普及す——滔々たる浮華輕佻の俗——歴史と国民教育——武蔵は天府の地——武蔵武士と正史野乗——武蔵武士と青年」として、武相すなわちは武蔵国と相模国、現在の埼玉、東京、神奈川にあたる広大な地域のなかの武蔵武士に焦点を当てて述べている。

天府の地である武蔵とその武士を称賛し、そこに必然として生まれたのが『武蔵武士』であると次のように説いている。

抑も昔時の武蔵は、月影の草より出でて草に入る広漠たる平野にして、右に洋々たる坂東太郎の長江を湛へ、常に深碧の色を湛えたる荒川は、中央を貫流して灌漑の利、水利の便普く、土地肥沃豊穰にして耕耘に宜しく、又牧畜に適す。而して秩父の峻嶺翠峰は相連りて其西堺を画し、両毛の赤城、日光、男体等の峯巒蜿々として遠く北背を限りて、自然の屏障となり、天然形勝の地たり。真にこれ天府の地と云ふべし。往昔皇族以下国司として任に此地に来る者は、多く空閑の地を開墾して庄園を起し、牧場を監して土着し、住人となり、やがては武士となりぬ。而してこれ等の武士は、自然の感化、天然の影響を蒙りて自ら勇健濶達の性情を養ひ、尚武の風、義侠の俗をなし、従て彼等の中より幾多の英傑俊材彬々として輩出し、荣誉ある武名を国史に貽しぬ。これ等の俊傑の勲績偉行は、正史は勿論稗史野乗に於ても博く喧伝せられ、世道人心を裨益する所少なからざりき。

▼武士道は戦闘者の思想

武士道は現代に生きるわれわれにはどこか無縁のもので、理解が難しい思想でもある。

武士道といえば、『葉隠』という書物に有名な「武士道と云ふは、死ぬ事と見付けたり」ということばがあり、これは武士のみならず日本人の死生観に迫るものであるとされている。また、^{にとべいなぞう}新渡戸稲造の『武士道』も名著とされているが、これについては異を唱える奥山篤信という論客がいる。氏は、映画評論家、文明評論家にして平河総合戦略研究所代表である。その著書『人は何のために死ぬべきか キリスト教から読み解く死生観』(2014)は大変面白い。

(「武士道と云ふは、死ぬ事と見付けたり 渋沢平九郎の自害を考える」を参照願いたい)

http://rkato.sakura.ne.jp/essay/e124_bushido_towa_sinukototo_mituketari.html

奥山氏は、新渡戸稲造の『武士道』は近代思想の産物であるとおつぎのように指摘する。

「武士道は、第一義に戦闘者の思想である。したがって、新渡戸をはじめとする明治武士の説く「高貴な」忠君愛國道德とは、途方もなく異質のものである。とはいえ、武士道が全く道德と相いれない暴力的思想であるわけではない。武士道もちろん、ある種の道德を含み持っている。だがそれは、一般人の道德とは大きく異なる道德である。平和の民にはおよそ想像を超えた異様な道德。それが、武士道の道德なのである」(下線は筆者による)

武士道が「戦闘者の思想」であることを念頭において、『武蔵武士』を読み進むとよいであろう。

▼武人の鑑 ^{はたけやましようじしげただ} 畠山庄司重忠

『武蔵武士』の典型的人物として最初に紹介されているのが^{はたけやましようじしげただ}畠山庄司重忠である。重忠は、^{はたけやましようじしげよし}長寛2年(1165)、大里郡本鼻村(現 埼玉県大里郡川本町)に生まれた。父は畠山庄司重能、母は^{みうらのすけ}三浦介義明の娘である。畠山氏は^{よしふみ}平良文の子孫で、^{ばんどうはちへいし}坂東八平氏のひとつ秩父氏の嫡流であり、さらに河越、江戸両氏はその庶流であった。この秩父一族が平安時代末期の武蔵において大きな影響力を持っていたという。

武人の鑑^{かがみ}と称賛された^{はたけやましようじしげただ}畠山重忠は、無類の力持ちでもあった。幾多の逸話が残されているが、^{ひよどりごえ}圧巻は「鶺鴒越で愛馬をいたわり担いで駆け下りた」という「鶺鴒越の逆落とし」の話である。寿永3年(1184)2月7日、源氏と平家の戦が始まった。一ノ谷の戦いである。源義経は^{ひよどりごえ}70騎の精鋭を引き連れ鶺鴒越にいた。そこは、獣の他は通ったことがないといわれるほどの険しい絶壁だった。

義経は、「鹿が通るところを馬が通れぬはずはない」と、試しに何頭かの馬を追い落としたりした。転げ落ちる馬もあれば、無事下った馬もあった。そこで、義経は続けて30騎ほどを駆け下ろさせた。その様子を見た残りの大軍が一気に駆け下りた。しかし、そのようななかで、^{はたけやましようじしげただ}畠山重忠は恐れおののく愛馬三日月を^{いたわ}労り、自ら背負って崖を下りたといわれる、剛勇かつ優しい人柄の持ち主であった。



ところで、馬を担ぐというような怪力話を俄かに信ずることができるだろうか。

『武蔵武士—そのロマンと栄光—』の著者福島正義氏によると、貫達人という歴史学者が、『平家物語』や『吾妻鑑』を考証するなかで、そもそも重忠は「鶴越の逆落とし」そのものに参加していなかったと述べているという。鎧兜など重量物を身に纏いながら、かつ馬のような重いものを担ぐのは不可能という見方である。真偽のほどは定かでないが、死後に創られた逸話の可能性が高いのではなからうか。

埼玉県深谷市の畠山重忠公史跡公園に、愛馬三日月を背負う重忠の像がある。

▼武蔵武士の勢力分布

『武蔵武士』には、一大勢力となった武士集団を紹介している。

武蔵の武士は多くは国守の子孫にして、庄園若くは牧場を根拠として勃興し、一族繁衍して地方に於ける一大勢力となり、天慶、長元の二乱を経て益々武を練り、続いて前九年、後三年の両役に従い、悪戦苦闘の間磊落たる風骨、清楚たる性情を養ひぬ。(中略)武蔵に生長せし武士を概称して武蔵武士と称すれども、これを子細に区分すれば秩父氏先ず主なるものにして之に加ふる七党併他数氏あり。

とあるように、秩父党（現秩父市、本姓は平氏）はじめ、野与党（現加須市付近）、村山党（現在の狭山丘陵付近）、横山党（現東京都八王子市、武蔵国および相模国北部に割拠）、猪俣党（現埼玉県児玉郡美里町）、児玉党（現在の埼玉県本庄市・児玉郡付近）、平児玉党、丹党（武蔵国入間郡・秩父郡・および児玉郡西部）、西党（武蔵国西部、多摩川流域）、私市党（現北埼玉郡騎西町）、その他諸氏が割拠していた。

▼武蔵武士と源平合戦

源氏と平家の間で、安元3年(1177)から元暦2年(1185)にかけ、日本全国で起こった戦を「治承・寿永の乱」と呼ぶが、これが世にいう源平合戦である。

源平合戦のきっかけとなった保元元年(1156)の「保元の乱」において、崇徳上皇と後白河天皇との皇位継承をめぐる争いにそれぞれ源氏、平氏の軍事力を使ったことが、のちに両者が中央政界での地位を確立することにつながった。その4年後、平治元年(1160)に起こった「平治の乱」では、平清盛が源義朝を破り、平家が台頭することとなった。

「平族にあらざれば人にあらず」とまで唱えられた平氏に対し、「頼朝は機会だにあらば旗を挙げ父祖の業を恢復せんと図り、密に北条、比企等腹心の軍と画策経営して地勢を

考へ形勢を察する所ありき。」と反撃の機会を狙っていた。

治承4年(1180)には以仁王もちひとおう(後白河上皇の子)が平家討伐を全国の武士に命じたいわゆる「以仁王の令旨」により、源氏に対して平氏打倒を促したことを受け、源頼朝は挙兵した。頼朝の弟義経の活躍もあり、源氏は「一ノ谷の戦い」、「屋島の戦い」で平家を破った。そして元暦げんりやく2年(1185)、「壇ノ浦の戦い」で源氏は平家を滅ぼし、かくして源平合戦は源氏の勝利で終わった。名実共に武家の棟梁となった源頼朝は鎌倉幕府を開き、建久3年(1192)には征夷大將軍に就任した。「いい国(1192)つくろう鎌倉幕府」という年号覚えの語呂合わせとなっている。

『武蔵武士』の解説に、本著が復刊された事情が記されている。

大正六年刊行の野村八良氏の「武蔵野の文学」大正二年に埼玉学生誘掖ゆうえき会から刊行された「武蔵武士」の両著は、その尤もなるもので名著として一世を風靡したのである。この両書は、早くから稀覯きこうぼん本に属し、古書肆の店頭にこれを求めることは正に至難なことであった。たとえ見出し得たとしても、その価は万金にひとしいであろう。ここに今回、「武蔵武士」が著作権所有者の格別な御厚志によって復刊を許されるに至ったことは、まことに喜びに堪えない。

武蔵武士 渡辺世祐 八代国治編 大正二年四月刊

武蔵武士序

埼玉学生誘掖会は、余輩埼玉県出身者相謀り県下の有力者を糾合して創立せしものにして、其目的とする所は都下に在学する青年の爲めに寄宿舎を設けて、其起臥寝食を共にし、互に志操を堅實にし脩学勉励して以て入徳の工夫に資すると俱に、本県旧時多数の諸侯ありて、其領地犬牙交錯し区々の余弊今猶存するものあるを一掃して、大に県情を疏通せしめむとするに在り、爾来十余年を経て事業緒に就くといへとも尚進脩の道を講せざるへからず、是を以て曩に本会理事の協議を以て、本県の古史に鑑ミて一書を著作し、其英雄豪傑を挙げ学生をして崇尚私淑の念を起さしめ、并て奉公忠誠の心を修養せしめむと欲す太古は邈たり、得て考ふへからず、奈良朝に当り京畿中国の人多く廟堂に顕はれ、爾後藤原氏の権勢歴朝に充滿し、其衰ふるに及びて源平相争ひ、源氏の竜騰に際し本県より出て天下に雄飛せしもの亦乏しからず、其子孫二行し基礎を関東に築きて、鎌倉開府を見るにいたる而して北条氏陪臣を以て国命を執るの日に於ても、尚武相を以て武人の冀北となす、所謂六十州の兵を以て武相兩國に当るへからずとするもの、豈其地理と歴史と相待て然らしむるものにあらずや、其後或は顕はれ或は隠れ、江戸幕府三百年の泰平に由りて復た武を用ゆるの機なく、其後裔韜晦して農と為り工商となりて、以て今日に至れるなり本会理事齋藤阿具君嘗て斯書著作の事を担当せられ、文学士渡辺世祐八代国治二君に囑して古記録を涉獵し、武蔵古武士の系譜伝記を抄録編纂し、書成て武蔵武士と題し、余に序を乞はる、受けて之を閲するに保元平治以降武人党伐の沿革より莊園制度の変態に至るまで詳密に叙述して洩す所なく、而して其潜会黙移他日大小名の種族を生するに至るの蹤歴々として掌を指すか如し、其勞多謝せざるへからず

夫れ本県の地たる八州の沃野に連り、遠く千仞の富岳を望ミ近く渺漫たる刀根荒川を擁し、形勝雄大全国無比の地勢を占め以て大都の屏護に当る、宜なるかな明治中興江戸を以て東京となし新文明の淵源を開く、本県の人士たるもの空前の光榮に感じ、七百年前の祖先を慕ひ発奮興起して天恩の万一に報せざるへけむや、学生諸子幸に科学を以て其知能を啓發し、斯書に依て其志氣を作興し、武魂文才以て中興の新日本に処するを得は、庶幾くは七百年前の祖先に愧つる所なからむ乎

大正癸丑一月大磯客舎に於て

青淵老人識

[Back](#)

「なんやか」TOPへ戻る

[Home](#)

「ホームページ」表紙へ戻る